

職場には職場の顔の我がいて日暮の早い薄墨の窓
森屋めぐみ

職場の顔と自宅の顔。そして自宅の窓と職場の窓。職場には職場の窓があつて自宅の窓とは日照時間がちがうのである。人は場面によつて、社会的位置関係がかわり、役割がかわる。当然のこと、顔もかわるわけである。

神様の夢見の悪き朝に生れオカビは生涯結論出さず

秋山智恵子

十月「東京歌会」は年に一度の吟行会で、上野動物園に行つた。私も久々に動物園の中に入った。天気の良い土曜日だったからたいへんな混雑だったが、楽しく二時間ほどをすごし、ヒゲマと象とコロンビアコロプスの歌を作つた。何をうたうかにその人の性向があらわれるから吟行会は楽しい。以下三首は上野動物園の歌。

オカビは世界三大珍獣に数えられる不思議な奴で、ネットで調べてみると二十世紀になつてはじめて存在が確認された動物だそう。シマウマに似ているが、キリンの仲間だそうである。この一首、オカビはなんだかよく分からない存在で、自分すらも自分がなんだか分からないらしい、の意味だろう。オカビの不思議さを前面に出して、つかみどころのなさを表現している。

光背に炎を立てる一羽なしフラミンゴ群れてゴエゴエと鳴く
加古 陽

何十羽と群れているフラミンゴの中に、一羽も目立つもの、傑出したものがなく、全員が「その他おおぜい」のように群れている様子を表現している。工夫された上

句の表現が見どころ。「ゴエゴエ」に、「エゴ」の逆という意味を読み取つてもいいのかもしれない。

紅に空染めあげて飛ぶというフラミンゴの群 心へ
放つ 森祐希子

園内では自由に飛翔できないフラミンゴの群れを、想像の世界に飛ばせた作。きわめてシンプルな表現で分かりやすい分、印象鮮明な作となつている。

死の棟のオウムの二人ちらとさへ吾を見ることあらざりしかな
坂口 弘

東京拘留所内でたまたま見かけたオウムの死刑囚二人。こちらは視線をむけたけれど、向こうはまったく視線をこちらに向けることはなかった、というのだ。拘留所内の小さなできごとをていねいに表現して一首にしあげている。相手がなにも反応しなかつたという不発のドラマをドラマにしあげた手腕。

歩武とふ名を一日に幾度も呼びつ息子に父になりゆく
篠田和香子

生まれて間もない孫とその父親が登場する。息子の名前を日に何度も口にするので父親になつてゆく、とする下句が、いい。冒頭部に、「歩武」と具体的に名前を出したのもよかった。

外灯のとぼしき浦にふり注ぐ十六夜の光のまこと明るし
梶尾利徳

衛星写真で見ると近年の日本列島には闇がなくなつたように見える。そんな状況を思い合わせるとき、懐かしいような月の光の表現がなんとも嬉しい。